

## 真・探り合い 1

※ 04「探り合い」のHとなります。本編ではありません。

タオルは置いてあった予備を借り、風呂へと向かう。昨日は遅くになってしまいハプニングもあって堪能できなかったが、今日は独占できる。できれば新しい方がよかったけれど、女子に譲るという見栄の為に我慢する。

「やっぱ広いなー」

それでも家の風呂に比べてずっと広い風呂に満足しつつ、徹はさっそく頭を洗う。

「ふんふーん……」

鼻歌混じりに頭を洗うと泡だらけで目が染みる。

「おっとっと……。シャワーシャワー……」

「はいどうぞ」

「さんきゅ」

健介も入ってきたのだろうか。彼も埃だらけだったし、さっぱりしたいのだろう。それにしては声が高く感じるが……。

「よいしょっと……。さてと、そんじゃ風呂入るか」

「ちゃんとリンスもしなさいよ。それに身体洗ったの？」

「細かいこと言うなよ。お前は女かよ」

「女です」

隣の人影が妙なことをいう物だからまじまじと見ると健介より大柄で丸みがあり、色白でついてない部分、膨らんでいる部分に大きく差があった。

「おいおい健介……って、なんでいいんちょ！」

「ほらほら、騒がないの……。はい、座る。リンスね」

「いやいや、なんでこっちに来るんだよ。せっかく新風呂譲ったのに」

「なんか鍵かかって入れないのよ。先生達も二人だけだったし、こっちだけ使うつもりだったんじゃないの？」

「だからってなんで入って来るんだよ。俺があがるまで待ってろよ」

「いいじゃない。昨日だって一緒に入ったんだし」

「イインチョが良くても俺が良くないの。第一、恥ずかしいだろ」

「立派じゃない」

「あのなあ。からかうなよ。っていうか、イインチョだって恥ずかしいだろうが……、その……裸見られてさ……」

こちらら睦美を見ってしまうことに徹は悪いと思いつつ視線を奪われてしまっていた。彼女の色白な素肌、最近始まった水着の授業の影響なのか日焼痕が目立つけれど、色白な部分は下着や布地に隠れた部分。それを見られるというだけでも性的な好奇心が刺激さ

れる。

さらにぽよんとポリ ユームのある乳房が二つ。綺麗なピンク色の乳首が小指の先程度に見え、やや大きめの乳輪の中心で勃っていた。

昼間のことを思い出す。彼女がどこかに逃げないようにとおぶったけれど、背中には柔らかな感触が当たっていた。一歩歩くたびに背中にぽにゅっと触れるあの感触。だんだんとチンポが苦しくなり、変に湿り気をおびてくる。

本当なら中腹でおろすつもりだったけれど、足場の悪さを理由に延長した。彼女は気付いているのだろうか？ そんな下心を……。

「だから、弟の見慣れてるってば……。んー、でも今は少し……恥ずかしいかな？」

「だ、だろ……だから……その、俺出るから」

「待ちなさいってば。ちゃんとリンスしないと。それに身体洗って。あんた埃っぽいよ？それに汗臭いし。ほら、座って……」

「いいよ。後でやるし」

「二度も三度も入るなんて面倒でしょ？ ほら、照れない照れない」

「いいっての……」

伸びる手を振り払いたいけれど股間も隠さねばならない。同時にするには二本足らず、結局振りほどけずに言われるままに座り直す。



「素直でよろしい。リンスね」

「へいへい」

「リンスってすぐ洗い流しちゃだめだからね。髪に馴染ませないと意味無いの」

「そうなのか？ 俺、いつもすぐ洗い流してたけど」

「だからカサカサになるのよ。保湿が目的なんだからある程度馴染ませないと」

「ふーん……。俺は男だからあんま気にしたことねーな」

「そんなんじゃ剥げるよ？ ハゲ徹だ」

「うっせーな……。って、目……。イタイって」

「あ、ごめん。しばらく我慢して」

「しばらくってどれぐらい？」

「リンスがなじむまで」

「ったく……」

ぶつくさ言いつつも目を瞑っている分、気も楽とそのまま待つことにする……。が、今度は背中に違和感。

「？ おい……。いいんちょ？」

「どうかした？」

「何してるんだよ」

「なにして身体洗ってあげてるの」

「誰も頼んでねーよ」

「だって、しょうがないでしょ？ あんた目がいたいんだから」

「だからってそんなことしないでいいよ」

「いいじゃない。さっきのお礼……。ほら、動かない……」

そういつて睦美は泡をたて、それを徹の身体に塗り始める。

「ひっ……。おい、なんだよ。洗うにしても普通にタオルで擦ればいいだろ」

「擦るのって良くないんだよ。正しい身体の洗い方はこうやって泡を立てて塗るの。こ

うやって……」

「お、おい……」

背後から、わきの下を通して手が伸びる。それらは身体を撫で回し、泡をぬりたくっていく。

他人の、しかも女の子の冷たい手が身体を這いまわることにはぞくぞくとした刺激を受けていた。

「な、なあ、もうそろそろ髪になじんだし……」

「まだ身体洗ってないでしょ？ ほら、ちゃんと手も洗う……」

手の指先まで掴もうと伸びる睦美の手。いくら徹より長いとはいえ限度はあり、背中に密着してしまう。

「あ……」

「んっ……」

背中に伝わる感触に徹の動きが止まる。睦美は彼の指先を握り、指を絡めていた。

「イインチョ……、その……当たってるし」

「なにが？」

「だから、その……」

「なにが？」

「いいんちよの……お、おっぱい……」

「おんぶしてくれた時も当たってたでしょ？ 今更恥ずかしい？」

恥ずかしい。同時にチンポに集まる血に焦る。先ほどから勃起させられていたけれど、さらに力みが強くなり、意識せずとも尿道を何かが滲む。

またあのとろっとした汁が出るのだろう。エッチなことに直面するとなってしまう不可解な現象。最近の困りごとだ。

「よいしょっと……、ちゃんと洗うんならすぐ終わらせるから……」

背中であるっと滑る睦美のおっぱい。上下され、おっぱいで背中を撫でられているのがわかる。

柔らかくも弾力があり、手よりずっと温かい。思った以上に心地よい刺激に先ほどからチンポが上下しまくる。

先に解放された右手でチンポを触るとぬるっとした汁が指に着く。ぬらあっと伸びるそれは生臭く、おしっことは違う意味で不快。

そうしているうちに左手と背中 of 刺激が離れていく。これで終わりと思うと残念だけけど、いつ健介が来るかもしれないと思うと安心もあった。

「お、終わりでいいよな……。さ、シャワーで洗い流して……」

わざとらしいカタコトな口調で良い、シャワーに手を伸ばす。

「まってまで。まだ洗ってないでしょうが……」

「お、おい……うっ」

睦美の手は太腿を触り、ふくらはぎを撫で、そして内股にも伸びる。

「や、やめろよ……おい……あ……」

「遠慮しない。あたしは弟ので慣れてるから……なにも恥ずかしくないから……」

「や、やめろよ……そこは……」

チンポに伸びた手に驚く徹。振り払いたいけれどなぜか力が入らずされるがまま。

石鹸塗れの睦美の手は徹のチンポを掴み、上下にしごき、時折陰囊を弄る。

「うっ……ああ」

下半身を中心にふわふわとした快感が芽生える。浮かんたり、ひっくり返されるような疑似浮遊感を感じつつ、びくんびくんとチンポを上下させる。

「いいんちよ……やめ……もう……なんか……」

「なに？」

「いや、その……」

片手で竿を、片手で陰囊を弄る仕草。それは早くもなく遅くもなく、彼女自身、探る様にした動作だった。

「ふう……ふう……」

喘ぎつつ、それ以上声が出ないように声をかみ殺す徹。抵抗はせず、ただ与えられる刺激を甘受していた。

カリ首を指で撫でられ、尿道を根本の方からなぞられる。ぬるぬるした手触りにねちゃりと嫌な粘着音が混じり始める。

「あ……あっ……」

耐えきれず、手を前にして壁にすがる。そうでもしなければ腰砕けになり、何かを漏らしてしまいそうだから。

「はぁ、うっ……あぁ……くう……」

息もたえだえになり、高い声を混じらせながら喘ぐ徹。情けないと思いつつもチンポをぬめぬめぬちゃぬちゃ弄られることの快感には逆らえない。

「なーに？ 女の子みたいな声出して……」

「う、うるさい……なんか、変なんだよ……」

「ふーん。そうなっちゃうんだ……男の子って……」

「くっ……なあ、もう、やめて……はなしてくれよ」

「……ふーん、じゃ、やーめた」

「うう……え？ あ……」

ぱっと手を離す睦美。背中心地よい重みもチンポを弄る刺激も途端に消え、夢うつつから現実へと引き戻すぬるめのシャワー。

「べべ！ べっべっ……おい、急に……ったく……」

頭をがしやがしや揉まれながら泡とリンスを洗い流される。髪がぺたっと張り付いたところのようにやくと止まると、睦美は咽る徹を見ながら笑っていた。

「あはは……変なのー」

「ったく、いいんちよめ……。後で覚えてろよ」

もやもやの残るままだけれどそれ以上先までしてほしいとも言えず、勃起したままのチンポをプラプラ上下させながら浴槽に向かおうとした。

「まっつてよ」

「今度はなんだよ」

「今度は徹が洗ってよ」

「何を？」

「あたし」

「一人で洗えるだろ」

「だーめ。じゃないと今野さんに言うよ？ 徹がお風呂に入って来てあたしに勃起チン

ボを見せてたーって」

「あのなあ、お前が勝手に……」

「あ、そうだ。今から悲鳴を上げようかしら？ そしたら井沢先生が来るかも」

「脅迫かよ」

「そ。脅迫。だから、ほら、ね？ 洗って」

「くそ……」

徹はタオルに石鹸を塗りたいくと軽く泡立てて睦美の背中に当てようとする。

「ちよっと高杉。あんたさっき何を見てたのよ」

「リンスで痛くて瞑ってました」

「あのねえ。身体を洗う時は泡を立てて塗る様にするの。その泡を身体に塗るのよ」

「だって、お前……」

「ほら、早く……風邪ひいちゃうでしょ？」

言われるままに泡を塗るべきだろうか？ どちらかと言えば興味がある。身体の洗い方ではなく、女の子の身体にだ。

百合子のように背丈があつて、乳房も大きい。一方で柔らかそうな乳房。先ほどから背中何度を感じさせてもらったそれを手で触りたくないと言えばウソになる。

どういうつもりでこんなことを提案しているのかは知らないけれど、彼女が言うならその甘言に従いたくもなる。

「よ、よし……」

泡を手塗りに塗り、彼女の肩に塗る。さらに背中。もう一度泡を立ててだんだんに向かう。丸いオシリ。やや濃い筋が見え、その先には皺くちやを螺旋にさせた穴が見える。

普段澄ました顔で同級生をガキ・弟扱いしている彼女もここから……。

触りたい気持ちもあるけれど、さすがに変態的と泡で触れる程度に抑える。さらに腕、太腿へと向かう。

彼女にされたように股間を弄るべきかと悩むが、あと一步が踏み出せない。

「高杉、真面目にやってよね」

「そうはいつでもよ……、やっぱりなんかこう、照れるっていうか……恥ずかしいっていうか……」

「ふーん、高杉って女の子の裸が怖いんだ。だっさ」

「別に怖くなんかねーよ……。ただ、インチョコの肌って綺麗だし、なんか変な気分っていうか、エッチなことじゃん。これ」

「……んっ……えと、そういう不意を突くのって狡くない？」

「なにがだよ……。というか、もういいだろ。後は自分で」

「やっぱり怖いよね。あーあ、徹っていくじなし」

「怖いっていうわけじゃなくて……」

「怖くないなら……、ちゃんと洗いなさいよ。ほら、まだおっぱいもお腹も洗ってもら

ってないし」

正面を向きなおる睦美は頬を軽く染めつつ、徹を怒っているのか不安なのか、そういう感情が混じった顔で見つめていた。

「いや、おっぱいって……」

「さっきから何度も触ったでしょ？ 今更恥ずかしがらないでよ」

「でも、手では触ってないし……」

「じゃあ、触ればいいでしょ？ ほら」

手を取られ、むにゅっと押し付けられる。

どきんとした。伝わって来た。

女の子のおっぱい。柔らかく、しっとり重い。

「あ……うん……」

鼻が苦しい。だから鼻息が荒くなる。吹っ切れたように両手に泡を乗せ、睦美のおっぱいに伸ばす。

「……」

伸ばされた手をじっと見つめる睦美。彼女もきつと触られることへの緊張があるのだろう。

ゆっくり伸ばし、ゆっくり沈める。

「んっ……」

柔らかく温かく、しっとり重い睦美のおっぱい。乳首だけがぶくつと感触があった。

「どうだ、さわ、触ったぞ」

「んっ……別に？ それぐらい何ともないし……。ほーら、ちゃんと洗ってよね……」

「い、いいんだな」

「だから、これぐらい平気だし……」

「いいんだな……触って……」

徹は瞬きも忘れて身を乗り出す。両のおっぱいを弄り、泡を塗りたくる。

「んっ……んっ……」

その動作に応じて睦美の口から声が漏れる。苦しいのだろうか？ けれど睦美はモノ欲しそうに徹を見つめる。

乳房を弧を描くように回しながら揉み、ぶくつとたった乳首を親指で撫でる。

「ああん……んっ……」

乳首を擦った時、堪えられなくなった睦美は甘い悲鳴を漏らし、慌てて口をふさぐ。

「ごめん……声……がまんできなかった。いいよ。続けて」

照れたように舌を出す睦美だが、すぐに一息つく。

彼女は床に座り、寝そべるようにして両手を広げていた。

「タイル、冷たい……」

「そっか……」



睦美を見下ろす恰好になり、徹は膝立ちで彼女のおっぱいに手を伸ばす。

おっぱいを手に平におさめ、おさまりきれないことを感じつつ、乳首を指で挟み、撫で、軽く引っ張る。

「んー、んっ……はあん……んっ……あ、きもちいい……んっ……」

「イインチョ、キモチイイの？」

「うん……徹もさっき、チンポ触られて気持ち良かったでしょ？」「緒よ」

「そっか……気持ちいいんだ……」

「んっ……ああん……ああ……きもちいい……徹、エッチだね……あん……。おっぱい、触られるとこんなふうになるんだ……んっ……あ……もう、徹……冷たいよ」

「え？」

「これ……」

ちよんとさきつぽを指で突かれた。睦美は指先を徹に見せ、生臭い汁を伸ばしていた。

「徹のおちんちん、触って良い？ いいよね……。おっぱい触られてるし……」

「ん……それはお前が……んっ……あ……」

乳房をさわりつつチンポを弄られる。心地よい手触りと股間、ケツの穴がきゅつとしまる刺激を受けどきどきさせられる。



むずがゆい感覚と身体の中を弄られるような感覚。どちらも普段感じることのない妙な浮遊感を伴い、同時にじんとした快感をもたらす。

「んう……ああ……くう……」

声が出ないように、何かが漏れないように声をかみ殺す徹はまるで獣のような唸り声。

「ああん……んっ、やあん……あ、もうちょっと強くてもいいよ……んっ、あん、上手……かも……あ、きもちいい……」

乳首を抓まれ、引っ張られ、甘い声を漏らす睦美は発情期の猫のよう。

「んっ……はあん……んっ……ねえ、高杉……んっ……ああん……気持ちいいかも……んっ……なんか、すごい気持ち……ね、もっとこっちに來てよ……」

言われるまま睦美に沈み込む。彼女のおっぱいに顔を埋め、チンポを股に挟む。

睦美は内腿でチンポをぎゅっとしてくれて、軽く徹のお尻を持ち上げる。

「ん？ あ……」

「んふ……ああん……」

チンポが温かくもじゃつとしたモノに触れる。そしてぬるぬるが強くなる。石鹸とは違うぬるぬる。先っぽからでるものと混じってねちよねちよと音を立てる。

女の子の股について徹はよく知らないけれど、そこからおしっこをするということだけは知っている。そこから滲む鼻水のような粘液。石鹸に混じってツンとした臭いがあるそれは、普段なら汚いと思うだろうけれど今は睦美と肌を滑らかに合わせるための潤滑剤。もっと欲しい、もっと出るとすら思えた。

「んう……んっ……んっ、んっ……」

「はあ……はあ……んっ」

半眼の瞳で互いの肌を見る。

プールが始まって日焼が見えるお互いの肌。

泡に隠れて、粘液が広がって白い筋をいくつも見せる。

擦れる肌。特に下半身、股間。勃起した部分が睦美の太ももを撫で回し、ときおりビクンと震えて尿道からどろっと出る。

「ん……ふう……」

こみあげる快感。けれどあと少し足りない。

先っぽの赤みの残る部分。それが擦れる時が一番気持ち良い。彼女の太ももよりも股間のびらびらしたところと触れる時が特に。そこは温かく、割れ目にそのままぬるっと飲まれそうになる。

ちょっただけ、もうちょっと……。腰を前につき出してみる。もっと睦美の股間にチンポを擦りつけたと思った。

「だめ……それはダメ」

けれど睦美は手でチンポを押し返してしまう。

「なんでだよ……、ちょっとぐらい」

「んもう……スケベ……。しちゃう気？」

頬に手が当たった。やはり冷たい手。それとも顔が熱いからだろうか。それは彼女も同じ。いつも冷静で表情を見せない睦美だけれど、今は潤んだ瞳と紅葉のような頬を見せる。じっと見つめてきて、唇で「しちゃう？」と動かしている。

「……しちゃうって、何を？」

「やっぱりだーめ……。ね？ だーめ」

今一つぴんとこない徹は言葉を間違えたようだった。

睦美は徹の頭を自慢のおっぱいに押し付けるとチンポに手を伸ばす。

「あ……おい……」

「ね、徹も触ってよ。指ならいいからさ」

「え？ あ、ここ……」

「んっ……ん……ふふ……やばい……あたし、こんなこと……んっ……はあ……はあ」  
手を取られて股間に誘われる。昔真奈と一緒に風呂に入った時に見たことがある筋。それはびったり閉じていた気がして、おしっここの時に指でぐっと開くと言われた気がする。けれど睦美のそこは柔らかくぬるぬるとほぐれていて、指は難なく内側へと忍び込む。温かい。それにでこぼこして指を求めているのか締め付けてくる。

でこぼこした内側をなざると睦美は肩を震わせる。乳首が唇に当たり、ちゅっと吸うとさらに……。

「んっ……ああん……えっち……あ……あ」

「おれ、どうなってんだろ……んっ……ちゅ……いいんちよ……」

握られたチンポをぎゅっとされる。それは弛む皮の分だけ上下にしごきはじめ、淡い快感をもたらしていた。

「いいんちよ……んっ……チンポ……握られると……」

「きもちいい？ ね、きもちいいの？」

「あ、ああ……うん、すごく……いいんちよ……なんか、出そう……出ちやいそう……」

「んっ……あたしも……んっ……気持ちいいよ……徹におっぱい吸われて……まんこ……弄られて……んう、あ、そう……そこ……うん……徹って上手なのかな？ あ……んっ……、すごい……かも……あ、こうなんだ……男の子に触れると……んっ……」

睦美は徹の指を感じたいのか目を瞑り鼻で深呼吸を繰り返す。時折鼻歌のようにリズムを刻み、思い出したようにチンポの先っぽをいじくる。

「んっ……ああん……あ、だめ……んっ……あんまりふかくいれちゃ……んっ……」

されるがままなのも悔しく、徹は睦美の割れ目をいじくる。

指を差し込み、上部にある突起を撫でる。ねっとりとした粘液で塗れた指でぬるぬる撫でると睦美は何度も肩を震わせた。

「んっ、あっ、あっ！ あ……あ……」

痛いのだろうか？ それにしては彼女の声は高い。同時に徹を抱く手に力が入る。

ポリュームのあるおっぱいに顔を挟まれると思考が暗転して止まる。ずっしりとした感触を受けつつ、少し大きめな乳輪を舌で舐め、ちゅうと突起を吸う。

「ああん……えっち……あつ、すっちゃうと……あ、おっぱいでちやいそう……ん、あ……んう……徹……徹……」

囁くように徹の名を呼ぶ睦美はカクンと身体を揺らす。

「んっ……んっ……んっ……」

「イインチョ？ いいんちよ……」

おでこにキスをされる。二回、三回……、何度も……。

徹も睦美の胸の谷間に唇をつけ、ちゅうと吸う。痕が残るかもしれないけどしていたい。彼女も嫌がらないし、そのままちゅっちゅと吸う。

「んっ……んっ……あ……んっ……」

胸に徹を抱きながら喘ぐ睦美。深く息を吐くと、しばし頭を振ると身体を起こす。

「んっ……徹……」

仰向けの徹を見下ろしながら、まだ勃起したままのチンポを見る。手を伸ばし、自分の割れ目に向け、逸らし、また向けて逸らす。

「徹……やっぱりあたし、しちやいたかも……」

「だから、何が？」

「ん……ねえ、徹ってあたしのこと……どう思う？」

「え？ どうって……」

「あたしは徹のこと好きだよ」

「え……」

「ん……ごめん。やっぱりいいや。忘れて……」

「忘れろって、こんな雰囲気無理だろ……」

「ん……だって、あたしだって……そりゃ……好きな人が良いし……、でも徹ってば、そういうの鈍感だし……」

「なんだよ、はっきり言えよ……」

「んもう……、徹ってそういうところ、ずるいわ」

唇を尖らせると睦美は徹の隣に寝ころび、握ったままのチンポを上下に扱く。

「うっ……あ……いいんちよ……」

「でも、気持ち良くさせてあげたいかな。こうすると男の子っていいんでしょ？」

「う……わかんないけど……でも、なんか……俺……ちんちんからなんか出そう……」

「うん……。いいよ。今日一日、あたしのお守りで大変だったでしょ？ そのお礼……」

「んっ……別に……そんなの……う……あ……」

「あ……、徹……もう……おっぱい吸い過ぎ……、痕ついちゃったじゃん」

右の乳房、内側に赤い染み。

「えっち……」

「ごめん……あ、あ……うう……あ」

チンポを抜く手が乱暴かつ早くなる。徹は痛みよりも強い快感をもたらす刺激に小さく小刻みに呻くばかり。

「う、あ……」

「徹ってばおっぱい好きなんだね……。あたしのおっぱいにキスマークつけてさ……。えっち……変態。スケベ……。今野さんに言っちゃうよ？」

「う……う……あ……」

真奈のことを思い出し、チンポがきゅっと上下する。

「きゃっ……」

短く悲鳴を上げる睦美。同時にびゅっと白い筋が徹のチンポから吹きだす。

「あ、う……」

徹は下半身から解放される快感に悶えて呻く。後頭部をタイルに擦りつけながら、それでも抜き続ける睦美の手に拒むのか求めるのかよくわからない仕草を繰り返す。

「ああん……、すごい……、へえ……臭いしねばねば……。へえ、こんなふうなんだ……。これが男の子の精子……。いっちゃうってことなんだ……。すごい……」

抜くことでぴゅっ、どろっと漏れる精子に目を見開き、睦美はチンポを弄る。手のひらに感じる男の子快感の衝動。自分なりに強く握って居るつもりだけれど、それをぐっと押し返す力強さを感じていた。

「へえ……へえ……」

精子がどぷっと出て指に手にかかる。白く濃く濁った粘液。この白いのが精子。青臭く、ねばっこくまとわりつくもの。

鼻水みたいな汚い印象しかないのに、なぜか興味をそそって仕方がない。もっとよく見よう。そう思い、顔に近づけると青臭い匂いがふうんと鼻を突く。

「ん……くさい……かも……もう、やっぱりくさい……徹っていうか男の子ってこんなくっさいものオチンチンに隠してるんだね」

「うう……」

口早くそう捲し立てつつ、興味は尽きない。鼻の頭を近づけ過ぎた。そのせいでちゃんと鼻につく。

「んっ……あーん、鼻に着いた……もう、徹のスケベ」

「俺のせいだよ」

快感の余韻が薄れ始めた徹は起き上がり、自分のお腹、睦美の太ももに垂れる石鹸とは違う白い濁った粘液を見る。それは自分のチンポから伸びているのを見て、自分が出したのだと理解する。

「ごめん、いいんちよ……おれ、おしっこしちゃったか」

「違うよ。射精……精子でしょ？ これ……あーあ、こんなに沢山出して……うわ……べっとべとだし、すごいどろっとしてる。かたまり？ もっと水みたいだと思ってたの

にね。鼻水よりもずっとどろっとしてるし……うわ……」

睦美はお腹にたっぷり出された精子を指でもてあそび、見せつけるように徹の前でぴちやねちやと伸ばして見せる。

「いいよ、見せなくて……」

自分の精子を見せられることがなんとなく恥ずかしくなり、徹は目を反らす。

「ふーん、すごい臭い……、すごい量だし……、溜まってるっていうの？ ね、徹って自分で処理したりしないの？ 男の子って自分で出せるって聞いたけど……」

「知らねーよ……。ほら、さっさと流せよ……」

「んっ、いいじゃん……。興味あるし……」

ねちよねちよ伸ばす睦美だったが、徹がシャワーを向けるとお腹のそれは無慈悲に流される。

「ああん、もう、酷いパパでちゅね……」

「何がパパだ」

「だって、これあかちゃんのもだよ？」

「……」

「これが、ここに入っちゃったら……あかちゃんできるんだよ？」



精子のついた指を下腹部になぞらせ、割れ目を指し示す。

「んふ……パパになる勇氣、ないもんね」

「しょうがねえだろ、俺はまだ……」

「ごめん。言い過ぎたね。ふふ……あむ……」

睦美はそういうとぺろりと指を舐める。次に出て来た時は白い濁ったでんぷんのような塊は見えず、喉がごくりとなる。

「にが……」

「おい……」

「徹の精子って臭いしどろっとしてるし苦いんだね」

「……んう……あのな……」

睦美の唇に白い筋。それも赤い舌がぺろりと舐め取り、またもごくり。その仕草を見ていると妙にいらいらさせられる。同時に股間がぴくんと上下する。

初の射精、妙な痛みを感じるけれど、あの甘い刺激と開放感はまだ一度感じてみたい。そう思うと先っぽからとろっと滴る粘液。

「さてと……お風呂、はいるっか……」

「……」

睦美は背を向けると浴槽へと向かつてあるく。

ぷりぷりと振られるおしり。おっぱいよりも重量感があり、丸みを帯びて柔らかそう。

きとおっぱいとは別の興奮があるのだろう。あそこはうんちをするところだけど、顔を挟んでみたい気持ちが起きるから不思議だ。これまでだったら絶対にそんなこと思わないのに……。

「ほら、早く」

「ああ……」

今更恥ずかしがることもなく、徹はゆっくりとお風呂に浸かった……。

ちゃぶちゃぶとお湯を波立てる睦美。その片方の手は湯面に隠れてチンポに伸ばされていた。

「また勃起してるんだ」

「しょうがないだろ」

「なにがしょうがないの？ うふ、あたしでエッチな気持ちになってるんだ」

「……そうだよ」

「んふ……そっか……」

「ったく……いいんちよってエロ女だったのかよ」

「そだよ。っていうか、お母さん、今頃お父さんとセックスしてるだろうし」

「ぶっ」

あっけらかんと呟く睦美に徹は吹きだしてしまう。

「おいおい」

「徹、もしかして本当に知らないの？ 植え休みってそういう行事だよ？」

「え？ え？」

「だから、子供達を余所に預けて、その間に心置きなくセックスする。だからこの村って四月八月誕生日の子多いんだよ」

「……そうなのか？ うーん……」

特に意識したことはないけれど、言われてみるとそうなのかもしれない。秋口にも刈り休みのお泊まり保育があり、十月十日を足すと……。

「知らなかった……」

「皆がそうってわけじゃないけどさ。うちの場合はそうってこと。弟もそんな感じで出来たわけだし」

「そうか……」

両親は昨日……。そう思うと妙な気持ちになる。夫婦なのだから当然だろうけれど、ほどのようなことを？ あまり想像したくない場面に徹は顔をばしゃばしゃと洗う。

「ふふ、考え過ぎだよ」

「いいんちよがいらんこと言うからだろ……ったく……」

「あはは……徹ってば純情だねえ……」

けらけら笑う睦美は握っていたチンポを離し立ち上がる。じゃばあっと水が垂れると陰毛からも滝のようにお湯が滴る。白い肌に隠れて色素の濃いびらびらが見えた。内側はピンク色のでこぼこしたあなぼこ。指でなぞった時、チンポが力むのを覚えている。

あそこに入れると手でされるより気持ち良いのだろう。びゅっと射精したらどんなに気持ち良いだろう。

もう上がるのか、去っていくお尻が左右にぷりぷり振れる。チンポを挟んでみたらさっきみたいに勢いよく射精できそう。今から背後から襲い掛かってめちやくちやに擦り合い

たい。そんな気分に駆られる。

「徹……」

縁に足を掛けて振り返る睦美。割れ目が広がり、お湯が滴るのが見える。

土気色のびらびらとピンク色の内側の肉。白光に照らされてテラテラ光るそれに視線は釘づけだった。

「いれちゃおっか、やっぱり……」

「……」

唇の端を上げて流し目を送る睦美。徹はふらふらと誘われるように歩き、痛いほど固く勃起したチンポの根元を掴む。

「んっ……」

睦美はそれを受け取る様に手を添えると、自分の割れ目にあてがう。

「なんか……怖いね……」

「いいんちよ……」

「んふ……徹……」

「いいんちよ……睦美……俺……」

「徹……今日ね、嬉しかったの……。来てくれたのも、「緒に遊んでくれたことも……おんぶしてくれたことも全部……。あはは……なんか好きになっちゃったんだ、徹のこと……。それにね、あたし……。なんかもう疲れちゃったから……。徹、慰めてよ……。ね？」

「……睦美？」

「徹……」

彼女の寂しさを埋めるのはそういうこと。男女の好意の行きつく先の好意。彼女は自分を好きだと言ってくれたが徹はどうだろう？ ふと頭をよぎる人影はあるのだろうか？

「俺は……」

徹は首を縦に触れるはずもなく……。



「……………あっ……………あっ、あ……」  
「くう……………うっ……………くう……」

踏み出す徹と腰を落す睦美。

「あ……………あ……………あ……」  
「はあ……………くう……………あ……………ああ……」

最初こそぬるっと入ったけれど、何かが少し阻む様な感じがした。無理に押し入れよう  
とするとそれは仕方なく通してくれる。同時に悲痛な睦美の声、滴る赤い線。お湯に垂れ、  
煙のように広がり消えていく。



「睦美……イタイ？」

「平気……かな？ んでも、ちよっとお腹？ 苦しいかも……。あ、わかった……」

「？」

「徹の……おっきいのかも……。あ、……んっ……、動くとすごいわかる……」

「んっ……」

ちゃぶちゃぶと波打つ湯面。睦美は縁に伏せるようにしてお尻をつき出し、徹の腰に擦りつける。

「うう……あ……」

温かく密着してくる睦美のおまんこ。きゅっと搾り取る様に収縮し、ぬちゅっと音を立てる。

「あ……くう……」

背後からしがみ付く徹。足の長さの都合、つま先立ちしないとすぐに抜けてしまう。一生懸命背伸びしてばちん、ばちん……。繰り返し腰を打ち付けるも彼女は意地悪にお尻を上げる。

「な、なあ……、もっと低く……」

「んっ、だって……勝手に……おしり……んっ、浮いちゃうの……んっ……んっ」

徹をからかってというよりも体が勝手に動いてしまう。初めて感じる男の子の熱さ、固さ、長さに戸惑いつつ、時折突かれる気持ちの良い部分の触れ合いに睦美の視界はぼやけていく。

「あー……だめ……、のぼせる……んっ……んっ……あ……」

快感とお湯の温かさでぼんやりし始めた睦美はがくつと身体を折り曲げる。縁にお腹を預けてお尻は徹に向けたまま好きだけ突けとばかりに差し出していた。

「睦美……睦美……あ、う……うう……」

ちようど良い高さの睦美のお尻を徹は両手で掴み、腰を打ち付ける。

ばちんばちんと威勢の良い音がした。

「ああん！ ああん！ んっ！ んっ！」

腰を打ち付けられ、お湯が跳ねる。先ほどまでよりずっと強く深いピストン運動に睦美は高い声で喘ぐ。

「ばか……声大きすぎるって……」

「んっ、だって……徹が……んっ！ ああん……急に……強く……んっ、んっ、んっ」  
慌てて口を押えるも喘ぐ気持ちは零れ落ちる。

ばしゃばしゃとお湯が波打つ様子は二人の高揚感に呼応する。縁を越えてどろっと滲む互いの愛液。ぬるぬるとした部分は結合部でじゅぶじゅぶ音を立て、お湯に浸っても拭えない。

「ああん……んっ……ああん、すごい……んっ、こんな……きもち……いいなんて……あ、だめ……んっ、いっちゃいそう……あ、あ、あ……」

タオルを噛んで快感を我慢する。同時にきゅっと締まる膣に徹は絞られ、彼の方が先にこらえきれなくなっていた。

「あ、う……………出る……………出そう……………」

「んっ、だめだってば……………んっ、なかはだめだよ……………んっ……………ああん……………お願い、徹……………我慢してよ……………」

「だって、こんなの……………うっ……………」

きゅうきゅう締め付ける睦美の膣に徹は悲鳴に近い声を上げる。彼女の中で果てたい気持ちもあるけれど、それは……………。けれどどうすればよいのかもわからない。快樂の行き先を求める徹とそれを拒む睦美。けれど彼女の膣は初々しい闖入者を捉えて離したくない。

「あ、だめ……………んっ、イク、イッチャウ！　いくいく、いくく……………あ……………あ……………」

不意にこらえきれなくなつた睦美は転ぶように前のめりに倒れる。にゅぽんと抜けたチンポは突然の虚空にまだ堪えられそう。

びくびく震える先っぽはだらっと粘液を溢し、彼女のお尻に垂らす。

「んっ……………んっ……………」

一人先に達した睦美は縁にしがみ付き、何度も身体を揺する。

「睦美……………おれ……………なんか……………もやもやするぞ……………」

「んっ、あ、徹……………ごめん……………、まだだったの……………、すごい……………びくびくしてるのに……………我慢してくれて……………」

涙の滲む瞳でチンポを見て睦美はすまなそうに徹を見上げる。

「だって徹のおちんちん、思ったよりおっきいんだもん。あたし、壊れちゃうかとおもつたし……………」

熱い肉の棒で抉られた睦美の割れ目はひくひく痙攣し、白と赤の混じる泡を見せる。彼女はそれが恥ずかしいのか、それとも嬉しいのか笑顔とも取れる表情で股間をお湯で流す。

「ん……………ああ、こんなにばんばんに晴れて……………苦しそう……………、あたしばかりいってごめんね。えと、でもちよつとアソコ痛いし、別の感じでしちやおつか……………えへへ……………」

睦美は髪をかき上げると徹のチンポを掴み、鼻を少し近づけるとお湯を掛ける。ぬるぬるした汁がある程度落すと意を決してパクリと咥え込む。

「あ……………」

温かい口腔内に包まれた徹のチンポ。柔らかな頬の内肉と、縦横無尽に蠢く舌先が絡みつく。

「んちゅぷべろ……………べろ……………ちゅうべろ……………ちゅ、んぐ……………ちゅう……………ぷはあ……………おっき……………んちゅ……………ぺろ……………」

苦しそうに一息吐き出してまた咥える。舌先で亀頭を舐めまわし、唇を窄めて鈴口の漏らす我慢汁を啜る。

「んあ……………お、おい……………睦美、そんなもん……………舐め難くても……………あ、あ……………うう……………」  
急にチンポを咥えだした同級生の奇行に徹は困惑しつつも隠微な刺激を与えられていた。

おしっこをするところを咥えさせる申し訳なさと、もやもやしていた気持ちを促す包み込む口腔内。温かく、柔らかくなぞり、ざらざらな舌の表面で何度も撫でられる。

「んちゅ、べろ……んぺろべろ、ぶはう……んちゅ……あーん、変な味なのに……なんか、また……んちゅ……ぺろ……ちゅう……」

チンポに夢中な睦美は身を乗り出して挑む。

どちらかというとき及び腰な徹は後ずさるが、睦美は彼の下半身に抱き着くようにして離さない。

「あつ、うつ……ああ……っ」

そろそろ堪えきれなくなった時、睦美の指が徹の肛門に触れる。突然のことにびっくりした徹は股間の力みを緩めてしまう。

「やべ、睦美、出るって……口に……やべ……出ちゃうって……うつ！」

せめて口の中はと思い彼女に離れるよう促すけれど、睦美はすぽんのように吸い付き、チンポを咥えて離さない。

普段理知的なお姉さんのポジションの睦美だけれど、ひよつとこのようにチンポに食らいつく睦美からはそんな印象など微塵もない。

「んっ……んぶ……ぶぶ……んぐく……ぐく……ちゅぶ……ぐく」

びゅっびゅと出る精子。睦美は鼻を鳴らし、苦しそうに目を瞑るけれど喉を鳴らしてそれを受け止める。

「あ……あ……」

精子を漏らしながら、それをちゅうちゅと吸われていく。

かろうじて立っていられるけれど、醸される快感には抗えず、精子をだらだらと垂らし続ける。

「んぐく……ぐく……ちゅ……んふう……んふう……徹……、きもちい？」

びゅっびゅっという開放感が下腹部にシンと響く軽い痛みに変わってとくんととくとチンポが振動する程度になる頃には睦美も唇を離し、徹に微笑んでいた。

「睦美……ごめん、口に……」

「んふ……。だって、お腹でうけるわけにいかないし……。でも外に出しちゃうのもなんか寂しいし……。あ……。……、飲んじやった」

口を開いて舌尖にある白い濁り汁を見せつける。けれどそれも口を閉じて再度開けた時、消えていた。

「睦美、お前、ヘンタイかよ……」

「誰が変態よ。人のおくちを便器みたいに使っておいてさ」

「そんなことしてないだろ……」

「だって、徹が挿んで離さないからでしょ？ あー、苦しかった……」

「自分でしたくせに」

「そだよ」

「やっぱり変態じゃねーか」

「んふ……、おこちゃまな徹にはフエラは早かったかしら？」

「なんだよ、ふえらって……」

「おちんちんをたべちゃうこと。あたしだってこんなことしたくなかったってば。でも、なんか徹のおちんちん見てたら美味しそうでさ……、我慢できなかった」

「怖い事言うなよな……」

「うふ。食べちゃったら徹、女の子になっちゃうね」

「おいおい」

「冗談。でも、あー、そっか……結局あたしも……」

睦美は湯船に浮かんでいたタオルを掴むと絞り顔を拭う。

「なんか寒くなっちゃった。ほら、入ろうよ。あ、もしかしてまだ恥ずかしいとか？」

「んなことねえけどよ……」

「じゃあなんであたしのこと見ないの？」

「そりゃ、だって……」

互いに初めて異性と繋がったことで疲れたのか、肩を合わせて再び湯船へと沈んでいた……。

波打つ湯船。

弾ける音。

ちやぶちやぶちやぶ……。

んっ、んっ、んっ……。

あっ、あっ、あっ……。

互いに向き合い、肩に身体に手を伸ばし、しがみつき、股間を中心に前後動作を繰り返す。合いの手のように漏らす声は低く高く、断続的に漏れる音……。

最初は数を数えていた。一、二、三……。温まるまで百を数える習慣的なもの。

熱いと額を拭った後、置いた手が重なる。ちらりと見たら相手も見ていた。

最初に笑ったのは睦美の方。徹はむっとしてその手を握ると彼女は「バカにしたわけじゃなくて、なんか嬉しかった」と笑顔で返した。

唇が濡れて光を反射する。取れ立てのみずみずしいフルーツを連想させる艶。偶然触れた時、その柔らかさに戸惑った。自分のかさかさなそれとは違い、じゅんと沈み込む様な柔らかさと感触があった。

——キス、したいの？

ずっと唇を見ていたのに気づかれた。その時はからかうような笑顔。けれどそれも素敵だと思えた。素直に、対抗心とか抱かずにそう思えた。

——ふふ、したいんだ……。いいよ。しょ……。徹……。

手を握られ、どちらからとなく近づく。あと少しというところで踏みとどまる睦美。今更照れることもないのと思うと、彼女は目を瞑った。

——やっぱ恥ずかしいし……。んっ……。

照れくさそうに笑う彼女を見ていると気持ちを抑えられず、そのまま抱き寄せた。そして固い唇を押し付けて、受け入れて、触れ合って……。

——んちゅ、ちゅ……。んう……。ちゅ……。

——ぺろ、ちゅ……。ちゅう……。んちゅ……。

踏み込まれたそれに驚いたけれど、そのまま自分も踏み出した。重なるモノ。探るモノ。絡め合うモノ。

吸うのか、それとも吸われるのが作法なのかわからない。兎に角彼女を見ていた。

——んっ……。徹……。じっと見ないで……。キスしてる時、なんか変な顔になってるかもしれないし……。

恥ずかしそうに言う睦美を見るのは今日何度目だろう。その度に気持ちが湧きたち、穏やかでいられなくさせられる。

——睦美……。

名前で呼ぶことに抵抗が無い。とにかく今は彼女と唇を重ねたい。

——睦美……。

握られた手が強くなる。

同時に手が彼女の胸に触れていた。温かい。十分にあったまったから温かい。柔らかいし、すこし生意気な反発もある。そして中心だけちょっと硬い。手に触れる突起を抓むと睦美は肩を震わせてわなないた。

——徹のエッチ……。もう、さっきしたでしょ？ だーめ、キスだけ……。ちゅ……。ちゅ……。

キスだけで終われるのだろうか？ わからない。わかる。もうすでに……。  
重なった手を導く。

——んちゅ……。んちゅ……。んっ？ え……。あ……。徹の……。まだおつきいんだ……。でも、さっきしたし……。だめだよ？ ね？

困ったような表情で見返してくる睦美。けれど彼女だって期待しているはず。その証拠におっぱいを触れば高い声で鳴くし、心臓の鼓動がドキドキと忙しない。

——んっ……。だめ……。えっち……。もう……。んっ……。んっ……。ああん……。ずるいよ……。あたしだって気持ちいいんだし、我慢してるのに……。

切なげな表情を押し殺し、責めるように見つめてくる睦美。唇は濡れていて赤く誘惑的。今更キスだけで我慢できる程、徹のモノは優しくも無い。

——んっ、だめだってば……。ね、また今度……。その、コンドーム……。お母さんのもらって来るから、それで……。ね？ ちゃんとつけてくれたら徹のしたいだけしてあげて……。それで我慢してよね？ ね？ もう、お姉ちゃんに我儘言わないの……。なんちゃって……。

おちゃらけた言い方でごまかすけれど、彼女もチンポを放そうとしない。本当は睦美だつて……。

——んう……。ね、ちょっと待っててね……。いい？ 少しだけだから……。ね？

睦美は立ち上がると徹のおでこにキスをしてから風呂場を後にする。扉も閉めずに脱衣場で何かを探すと、また戻ってきて湯船に飛び込む。

——二回だけだからね？ これしかないんだから……。本当に二回だけ。いい？ お姉ちゃんとの約束よ？

——何がお姉ちゃんだ。我儘言つて家出して、神社に閉じこもってるような奴がよく言うよ。

——むっ！ どうしてそういうこと言うの？

眉を吊り上げ、伸ばした手に力を込める。女子の握力とはいえ骨も無いぶよぶよしたチンポでは抵抗もできない……。はずだった。

最初こそしてやったりと不敵な笑顔を見せていた彼女だが、力を込めても委縮しないソ

レに対して困惑を強めていく。そして唇の端が上がったところで呟く。

——すごいんだ……。こんなになるんだね……。男の子のって……。

揺らめく水面で歪む直線のシルエット。睦美は立つよう促すと自分がかがんで腰周りに手を着く。

——あむ……。んちゅ……。

——うう……。

また温かい彼女の口に包まれる。二回目のフェラチオにこそ驚かなかったが、快感には耐えられない。もごもごと蠢き、涎と舌でねちよねちよと表面をなぞる。時折カリ首をなぞり、やや柔らかい尿道を舌先でぐいっと押し込まれた時、尿道の我慢汁が強引に押し出される。

——うぶ……。んごく……。にがいし、臭いの出た……。

咽てけほけほ言いながらチンポから口を離す。糸状の唾液が彼女の唇とチンポを結ぶそれは数珠のような球を作ってしばらくして途切れた。

——あたし、変かな……。

——変だろ。だってちんこ啞えるなんてさ……。

——それは変じゃないよ。愛だよ、あ・い……。

——愛？　これが？

——そ……。好きから愛に代わっていくの……、

そう告げる睦美に徹はついていけなかった。正直、睦美に対しては興味無しから急速に気持ち膨れていた。身体を密着させて、初めての快感を交えた相手。ただの友達とは違う存在。お互いのことを他の子よりも知らないというのに。

——睦美は俺のこと……。好きなんだ……。はは。

——そだよ。徹のこと好きになっちゃった。

屈託なく笑顔で言う睦美はカワイイと思った。

——だからさ、なんか裸見られるの、ちよっと恥ずかしい。

——んだよ、ずっとガキ扱いしてたくせによ。

——しょうがないじゃん。昨日まではがきんちよ。でも、今日からは男の子、んーん、好きな人……。男だもん。ちよっと気合入れたんだよ。ここの毛も整えたし……。えへへ。

割れ目をなぞりながら恥ずかしそうに笑う睦美。彼女は風呂の縁に置いた包みを取り、ぴりりと破る。頼りなげな半透明の指サックのようなものを取り出すと、チンポにあてがい、ゆつくりと根本まで包む。

——いつ……。

——あ、ごめん、痛かった？　あたしも付け方よくわかんなくて……。えと、ここをひっぱって……。

根元まで包んだあと、先っぽを引っ張り弛みを見せる。一体それがなんの意味があるのかわからずにいると、睦美は人差し指を立てて説明してくれる。



——ここをこうやって伸ばしておくと、そこに精液が溜まって破れにくくなるのよ。保健で習ったでしょ？

最近、男女別々の保健の授業があったけれど、そんなことは何一つ教えてもらっていない。確か理科の授業の延長のおしべとめしべについて言われた程度。なぜこうも男女で知識に差が出るのか不思議だった。

——ま、とにかく……、こうしてすれば平気なんだってば……。

——なにを？

——だから、エッチ……。もう、言わせないでよね……。やっぱり徹ってスケベだよね……。いじわるだし……。

——すまん。

——んふ、冗談。照れ隠しだってば……。それに、えっちするって自分で言うとなんかお腹熱くなっちゃうし、徹のが早く欲しくなるの……。ね、来てよ……。エッチ……。徹とエッチしたいよ……。

——ああ……。

自分の割れ目を指で開き、誘って来る。睦美の仕草の意味は知識では理解できないけれど、本능がそれを求めている。

徹は歩み、彼女の身体を抱き、自分の一部分を持ち、あてがい、そしてもう一度踏み出す。

——んう……。あ……。んっ……。あは……。徹……。とまた入っちゃったね……。

——くう……。うっ……。はあはあ……。睦美……。俺たち、どうなってるの？

にゅぷりと音を立てて飲み込まれるチンポ。柔らかい、温かくてときおりきゅっと締め付けて来る。

——うっ……。く……。

薄いゴム越しに感じる温かさと締め付けに戸惑いながら前に出る。ぬぶぷっと鈍い音を立てながら彼女に深く沈み込む。

——ああん……。んっ……。んっ……。

学年集会の時に聞く低い冷静を装うものとは違う声質。耳に残る高い声。甲高く、癪に障る音質。けれど力みが強くなる。気持ち搔きたてる。そんなもの。

——んっ、んっ……。んっ、んっ……。

ゆっくり腰を前後させる。突き出し、引き抜き、ぬぼぬぶ音を立てる。

単調な動作にも関わらず、身体の根幹を揺さぶる刺激が生まれては消える。もう少し、もう少しだけと求める気持ちは飲み干した後の缶ジュースを逆さにして雫を求めるようなあさましい行為。

——んっ！ んっ！ ああん！ すごい、奥、奥！ 奥に来てる！

最初こそ睦美の身体を慮ってゆっくりと浅く突いていた。それが徐々に踏み込みが強くなり、湯面を激しく波打たせていた。

ばんっばんっばんっ！

最初こそびたびたと音を立てていた二人の交わり。それがだんだんと大胆になり、睦美のお尻と徹の腰周りは力強くぶつかり合う。

ぬぶうとチンポが抜けると白い半透明の膜に泡と粘液が糸を引いていた。

――抜けちゃった……。

――んっ……だめえ、はやくう……。

尻たぶを持ち上げ、割れ目を見せつける睦美。その仕草に不思議とかつ頭が熱くなる。怒っているわけではないのだけれど、目に力が入る。自身の変化に戸惑いいつも徹は睦美のお尻を掴み、チンポをあてがう。

――あん！ んっ……んう……ああん……。

最初こそ気を遣ったつもりだが、今はまるでモノのように掴み、腰を乱暴に前に出す。鼻の頭がっんと熱くなって冷静な思考ができそうにない。級友と喧嘩をしている時のような気分だった。

――んうゝん、ああん……んっ、やん……やんっああん！ 徹……徹……。

お風呂の縁を掴み、お尻をつき出す睦美からは普段の知的な印象が無い。チンポと割れ目の遊びがエッチな行為なのは今日初めて知ったけれど、睦美もエッチが好きな女の子だとは思わなかった。

――ああん……ああん……んっ、徹、もっと……んっ、あ、いきそ……んっ！ くう……あ、うっ、うっ、ああん……んっ！ いく！

軽く悲鳴を上げて身体を小刻みに震わせる。手を徹の腰にはわし、指でじつくり押す。

――うっ……ぐう……。

彼女の苦悶の吐息に合わせて膣内が微動を繰り返す。それはゆっくり徹のモノを締め上げ、奥へ奥へと誘うように蠕動する。

その細やかな刺激に徹はまた快感の予兆を感じるも、もう少し気持ち良くなりたいと我慢する。

――徹……んっ、おっきい……し、固いよ……。んっ……あったかいし……。

とぎれとぎれに漏らす睦美ははあはあ息を切らし、笑顔を向ける。

――なんだよ、ばかにするな……。

どうしてそう思ったのだろうかわからない。何か余裕を見せつけられたような気がしたのかもしれない。徹はぐいっと身体を前に出し、睦美の穴を抉る。

――ああん！ くう！ 今いつてるのに……ああん、徹のオチンチン……んう……ああん、すごいきもちいい……んっ！ んっ！

再びびくびくっと肩を震わせる睦美。同時に彼女の中が激しくうねり、徹のチンポを柔らかい圧迫で襲う。

そろそろ我慢できなくなっていた徹はチンポへの複雑な刺激に耐えられず、ピンとつま先立ちになって睦美のお尻に自分の股間を押し付けていた。

——んう！ ああん……すごい、きもちいい……んっ！ んっ！ んっ！ ああん……  
あんあん……ああん……んっ……くう……ふううん……。

——うう……ぐう、うっ……ああ……。

ねっとりとした悲鳴を漏らす睦美と絞り出す徹。チンポは自分の意思とは別にびゅっぴゅと精子を吐きだし、上下にぐいぐい竿を振る。

チンポが上下するたびに睦美は甘く喘ぎ、眉を顰めた。

——はあはあ……はあはあ……うっ……はあ……。

ようやくチンポの動きが収まり、少し小さくなったところでぬぼりと抜く。そのままゆっくり湯船に沈む。

——んう……はあん……んもう……徹のすけべ……。あたし、二回もいかさたし……。

睦美もそのまま湯船に沈み込み、あの不敵な笑顔を見せる。

——睦美……は、なんでそんなに余裕なんだよ……。

——ええ？ 余裕なんて無いよ……。あたし、徹にされまくってもうめちゃくちゃ……バカになっちゃったし……。

——でも、笑ってばっかだし……。

——えゝ、だって、徹に抱かれると嬉しいし……。

——っ……。

笑顔の理由を素直に告げる睦美はじゃばじゃばと徹の方へと行く。

——余裕があったわけじゃないよ。ほんと。徹に抱きしめられて嬉しくって……。でも、すぐに変な顔になっちゃうし、あたしだって我慢なんてできないよ……。

柔らかくてずっしり重い睦美の身体がしなだれかかって来る。ついでおでこにキスされた。そういうところが余裕を見せているように思えた。

——はい、立って……。

言われて立たされると、しなしなになったチンポに睦美は手を伸ばす。先っぽに白い濁り汁の溜まったコンドームを捲るときゅっとカタ結びして縁に置く。ぬらぬらとしたチンポをお湯で洗い流すと睦美は先っぽにちゅっとキスをする。

——んっ……んふ……徹。あのさ、相談んだけどお……。

内腿から回された睦美の手がお尻を撫でる。さっきまであんなにふにやふにやだったのに徐々に鎌首を持ち上げるソレに睦美は笑顔で舌を見せる。

——もう一枚、あるんだよね。これ……。どうする？

未開封のそれをする睦美はやはり笑顔だった。

洗い場にある凹の形をした腰掛を湯船に沈めて睦美を座らせる。途中何度か浮かび上がってしまい、上手く腰掛けられずに二人で笑いあった。

腰かけた睦美に前のめりに近づくと彼女の笑顔が不安そうに曇る。期待半分、性的な興奮で乱れることの恥かしさはあるようだ。

勃起したチンポは先端から体中のお湯が伝って滴り、おしっこをしているように見える。徹は手を伸ばし、彼女の大きなおっぱいを掴む。

「あんっ……」

目を瞑り身体をびくっと震わせる。

手が沈み込む。それぐらい大きい。温かくて柔らかく、少しの反発を返す。お腹周りを弄るとおっぱいより柔らかい。

「くす、ちよっと、おなかくすぐったいし……。おっぱい触ってよ」

「ごめん、なんかおなかのほうが柔らかくて気持ちいいんだ」

「むー、それって太ってるってこと？」

「はは、睦美ってあんま運動しないんだろ？」

「しょうがないでしょ。そんな暇ないし……。んっ……。んうふう……。」

柔らかいお腹周りへのイジメもそこそこにリクエスト通りおっぱいを触ってあげる。

お腹周りもおっぱいも似たり寄ったりのはずなのに、おっぱいを弄る方が気持ち興奮する。鼻の奥が熱くなり、呼吸が苦しくなってしまう。

「……ふうふう……。はあ……。はあ……。」

視線を伏せて呼吸を荒げる睦美。閉じていた股を開き、タオルを置いた縁に背中を預ける。

また後ろからするよりも前から抱きしめたい。それに本当に彼女がエッチの最中に笑顔のままかどうか気になった。だからこうやって正面から彼女を求めている。

「んう……。んっ……。はあはあ……。」

苦しそうに、それでも嬉しそうに声を漏らす睦美。挟られた割れ目は少し開いているように見えた。

「な、なあ……。ちよっと見ていい？」

「え？ なにを？」

「睦美のアソコ……。」

「あそこって……。恥ずかしいし……。」

「いいじゃん。な、頼むよ……。」

「んう……。徹のエッチ……。」

睦美はしぶしぶお湯から上がると縁に腰掛け、股を開く。

「あんまり綺麗じゃないかもしれないけどさ……。」

唇を尖らせそっぽを向く睦美。彼女でも割れ目を見られるのは恥ずかしいらしく、顔が

赤くなっていた。

「こうなってるんだ……女って……」

広げられた股の間に顔を近づけ、鼻息を荒げて顔を近づける。

薄い陰毛が茂る股間。割れ目はやや色素の濃いびらびらしたモノが扉のようにあり、内側のピンク色の肉を隠していた。

割れ目の上の方には膨らみがあり、そこに皮に隠れた突起があった。

そこからはお湯が垂れ、時折白い泡が見える。先ほどここに自分のチンポを出し入れして、一緒に気持ち良くなっていた。どうしてチンポをこのあなぼこに入れると気持ち良くなれるのか不思議でしようがない。パッと見てグロテスクなびらびらと変な臭いのする口よりも複雑な形をした穴だけなのに……。

「んっ……」

指を入れてみたら彼女は驚いたように声を上げた。同時に肉穴がきゅっと収縮した。彼女が震えるとなさなるらしい。

「ごめん、痛かった？」

「へーき。ただ急に入れて来たから驚いたのよ……。もう、いたずらっ子なんだから」

「だって、睦美のここ、なんか……こう……」

「ん……もういいでしょ？ ほら、徹のおちんちんもあたしの中に入りたかがつてるでしょ？ ね、しようよ……」

したくてたまらないのか、それとも割れ目を見られることが恥ずかしいのか、睦美は急かしてくる。

徹としてもすぐに入りたいのだけれど、もう少し見ていたい気持ちもある。そして少し味わってみたい。つまり、舌で……。

「んっ！ ちょ！ ああん！ なに……してるのよ……」

「ぺろ……ぺろじゅず……ちゅ……ちゅ……」

舌を伸ばして割れ目を舐める。奥から溢れるお湯を吸うと、少し粘液質だった。

「んっ……ああん……ちょ、この変態……エロガキ、やめなさいってば……んっ……ふう……んっ、あ……」

ぺろぺろちゅうちゅうと割れ目を舌で舐め、吸う。睦美は足をばちやばちやと揺らして暴れ、徹の頭に手を置きわしゃわしゃとする。

「んちゅ……ちゅう……ちゅ……ちゅ」

「ああん！」

上の方にある突起を舌で舐めた時、睦美は背筋を反らせた。一際高い声を上げていた。ここが弱いのだろう。痛いわけではない。多分キモチイイのだ。だからもう少しイジメてあげたい。さっきオチンチンを口でされた時のように。

「ぺろぺろちゅ……ちゅずう……ちゅっちゅう……」

舌を使って吸い、指をねじ込み内側を撫でる。凸凹の内側をなぞると睦美は気持ちよさ

そうにわななく。

「あっ、あっ、あっ、だめ……んっ！　だめ……おねがい、まって……それ以上しないで……んっ！　ああん！」

頭の上ではおっぱいがぶるんぶるん揺れる。時折頭に乗せられるのが邪魔なので手を伸ばす。大きく掴みがいのあるおっぱいを鷲掴みにし、乳首を指で挟みながらぐいぐいこねくり回す。

「ああん！　んっ！　激しいってば……んっ、んっ！　ああん……そんなに乱暴にして……えっち……えっち、徹のえっち……んっ！　えっちだよ……」

甘える彼女の声が耳に絡みつく。徹は声に誘われ立ち上がると、今度はおっぱいに口をつける。

興奮で上気し、突起した乳首をちゅつと吸う。

「んっ！　ああん……えっち……んっ……やつぱりおっぱい好きなんじゃない……」

乳首を吸い、軽く噛む。

「あ……」

ちゅうと吸いつき、片方も強く揉む。

「んふう……んっ。ああん、苦しいよ……くるしいくらいキモチイイ……」

乳首を吸い、おっぱいを揉む。自分の行為に興奮した徹のチンポが先ほど同様に固くなり、彼女の下腹部に触れる。

「んう……だめえ……徹のえっちい……ねえ、はやくしよ？　ね？　ああんもー、あたしがしちゃうからね……」

待ちきれないのか睦美は徹のチンポを掴むと自分の割れ目にあてがう。

「ちゅう……ちゅちゅ……」

「んっ……んっ……徹のおっぱい好きの変態甘えん坊……。んっ……それなのに……おちんちんばっかり大きくして……んっ、お姉ちゃん、怒るからね……」

「睦美……んっ……」

「呼び捨てにして生意気ね……んっ……こうしてあげたら気持ち良くて……生意気な口たたけないんだから……んっ、んっ……ああ！　んうふう……」

徹の腰に手を回し、ゆっくり抱き寄せる。

ぐぶぶと音を立てて沈み込む徹の身体。睦美は長く息を吐き、彼の体温を一番敏感な部分で受け入れた。

「んふう……はあ……はあ……徹、お姉ちゃんの中、温かい？」

「温かい……。それにキモチイイ」

「そ？　うふ……ああん、お姉ちゃんもキモチイイよ……んっ……はあはあ……んっ」

「動くぞ？」

「んもう……生意気……」

「んっ……んっ！」



「あっ！ あっ！」

ゆっくり腰を前後させる徹。お湯が揺れて縁からしぶきが上がる。

じゃばじゃばと水に阻まれゆっくりと腰を前後させるセックス。刺激こそ少ないけれど、向き合い、たがいに見つめ合うと気持ち昂る。

睦美は瞬きを何度もしていた。徹を見つめ、何度も眉を歪める。笑顔は見せないけれど、モノ欲しそうに口を開けて舌を伸ばす。

「んちゅ……ちゅ……」

徹が腰を折り、睦美の唇を吸う。舌を搦めて唾液を吸い合っていると、膣の中がきゅきゅう締まる。細かく蠕動する刺激に徹のチンポは今にも射精してしまいそうになる。

「んちゅ……ちゅ……徹……ねえ、もっとキス……」

「ごめん、出そうだから……ちよいまつて」

「んもう、いいじゃない……出していいよ……。だからキス……」

「お姉ちゃんだから我慢しろよ……」

「ふんだ……調子良い時ばかり……んっ……んっ……はあん、ああん、ゆっくりされるのいい……ああん、きもちいい……んっ」

腰に力を入れて射精すまいと腰を前後させる。じゃばじゃば水しぶきを立てて動く。たぶたぶ揺れる睦美のおっぱいを強く掴み、睦美を虐めてみる。

「んう……んっ……ああん、強いよ……んっ……なのに……」

痛めつけたつもりだけれど彼女は喘いでしまう。そんな被虐的な態度に徹はさらに腰を強く突き立てた。

「んっ！ ああん！」

目をきゅっとつぶり、脇をしめる。手近な徹の腕を掴み、指を食いこませる。

背を丸めようとしてお腹のたるみが皺を作る。先ほどの粘液質な滴りが粘り気を見せてねちゃりと糸を引く。

同時に徹のモノがきゅっと締め付けられる。何度目になるかわからない睦美の締め付けに徹も目を瞑る。そうするとより強く彼女の仕草がアレに伝わるような気がする。

痒いや痛いと言う快感は耐えようがなく徹を追い込んでいく。

「んぐ……ぐう……あっ……」

また射精の予兆がしだった。

おしっことはまた違う放出を伴う欲。どろどろと粘液をゴムの内側に吐きだして堪える。そろそろ出したい。あの開放感をまた味わいたい。コンドームを付けたままだから、このまま最期まで睦美の温かさを感じて絞り出して欲しい。

痛みを伴う強い勃起で睦美を挟りつつ、出そう出そうという快感に悶えさせられる。

「んっ、んっんっんっ！ ああん、んっ！ ああん！ いくっ！」

徹の二の腕を掴んで引く張り、抱き着く。胸に抱き、首筋にキスをする。彼もまた彼女のおっぱいに唇を立てる。互いに歯を立てる。その痛みがかるうじて達する気持ちを踏み留める。

「んう……、んう……」

「あっ、かはあ……はあ……んう……」

呻きつつも互いに離れはしない。

徹はぐいぐいとチンポをねじ込み、これでもかと浴槽に足を踏ん張り、睦美を壁に押し付ける。

「徹……んっ……徹……ああん、いく……またいつちゃう……」

「んっ、俺も……睦美、イク……出る……」

「うん、いいよ。出して……。徹の顔……見せて……んっ……見てたい……」

「睦美……睦美……」

顔をキススレまで近づけて舌を伸ばし合う。細めた目、涙袋が痙攣するかのように



した後、かっと見開かれる。涙がぼろりとこぼれ、下半身だけ分離されたのかと思うほど、勝手にカクカクと前後していた。

「んっ！ ああん……くう……んっ……くう」

それは彼女も同じ。睦美も伸ばした腕で徹を抱き寄せ、びくびくっと震えていた。

それは彼女の中も同じ。びくびくびくっと震える徹のチンポを急かすように締め上げ、でこぼこの襷で射精を促した。

「うう……はあはあ……」

尿道を走る精液に徹は恍惚を感じていた。伸ばした舌先は酸素よりも睦美の唇を求めている。それがようやく触れ合った時、じゅずっと吸っていた。吐きだした欲望の分と交換のように唾液を吸う。ねっとりとした汁からつんとした鯁えた臭い。興奮がかるうじてそれを誤魔化し、舌を絡ませ合う。

「んちゅ……んちゅ、べろちゅちゅ……」

「んごくちゅ……ちゅう……」

舌を絡め、睦美に倒れ込む。射精後の疲労感と脱力で立ち上がる気が起きず、一方で睦美の柔らかい身体が気持ち良かった。

肉布団。失礼な言い方だけれど柔らかくて温かくて、それにすごく気になる臭いがする。そんな彼女の身体を独り占めできること。

女の子が気になる、好きになる。その理由がなんとなくわかった気がする。

「睦美……」

「んっ……なーに？」

「呼んだだけ……」

「んふ……甘えん坊なんだから……。お姉ちゃん、重いからこまっちゃうなー」

一足先に快感から醒めたのか、睦美は軽口を叩きつつ徹の頭を撫でる。

にゅるっと抜けるチンポに睦美の手が伸びる。ペリペリっぴちつとゴムを取ると、見せつけるように徹の目の前に見せる。

「二回目だと少ないね。色も透明っぽい？」

「別に見せなくていいよ」

「いいじゃん。徹とあたしの愛の証っしょ？ んふふ……。徹のおちんぽミルク、どんな味かな……」

「やめろよ。趣味悪いぞ」

射精を喰われているような気がして悔しかった。徹はまだ少し未練があるも彼女から離れると、ぬるぬるしたチンポを湯船の中で洗う。

そんな彼を余所に睦美はコンドームを弄ぶ。じろじろ見たあと、逆さに持ち、舌を伸ばす。とろっと垂れるそれはすりおろした山芋のよう。

「んふ……、とろーっとしてトロロみたい。臭いは青臭い？ 変なの……あーん……んっ、んう？ んう……んぶえ……にが……全然思ったのと違うじゃん……」

舌先に垂れたそれに目を白黒させる睦美。唾液がびゅっと出て、それで強引に飲み込むもまだ口の中に絡みつく。

「んべえ……苦いし絡みつくし最悪……。徹、もっと美味しい精子出してよね……」

「無茶いうなよ……ったく……。さっさとうがいして来いよ」

「いいじゃん。徹のが口に残ってて、なんかキスしてるみたい」

「……言っとくけどな、ちゃんとうがいしないとキスしてやらないからな？」

いったんは体内にあったとはいえ、排泄物を舐める趣味もない。睦美は唇を尖らせると蛇口で口をゆすいでいた。

「んふ……んごろごろごろ……ぺ……ごろごろ……べえ……はい、うがい完了！ はい、

ご褒美のちゅーは？」

「しねーよ。ったく……」

「ウソつき。もう、せっかくながいしてあげたのになあ……。徹っていいわる」

「何が意地悪だ。ばれるだろうが」

「あはは……そだね」



お風呂を出たら夕飯が待っている。その時に精液臭い口を開いたら……。

性交の興奮でハイになっていた睦美もそろそろ常識を取り戻したのか、再びうがいをはじめた……。

「ふう……」

「じゃ、上がるっか……、もうふやけちゃうし」

「あ、ああ……そうだな」

冷静になってしまえば先ほどまでのことは嘘のよう。なんとなく物足りなさもある中、睦美の後を追う。

「ちゃんと拭かないとダメよ？ えい！」

タオルを渡すついでにチンポを引っ張る睦美。

「いて！ おい、やめろよな！」

「うふふ……、だってかわいいんだもん。さっきまであんなに暴れん坊だったのになー」

「睦美だって、さっきまであんなにアンアン言ってたじゃねーか」

「うん。だってすごく気持ち良かったんだもん。ね、またしようね？」

「ぐっ」

言い返したつもりが素で受け止められて答えに窮す。ニコリと笑う彼女の顔が見られず、徹は顔をごしごしと拭い、まだ雫も残る身体で下着を身に着ける。

「ちよっと、ちゃんと拭かないとダメよ？」

「うっせー、いちいち言うな。お前はカーちゃんかよ」

「違うよ。恋人だよ」

「……そういうの、恥ずかしくないのかよ……」

「恥ずかしいっていうか、照れるかな？ それ以上に嬉しいから言いたいって感じ」

「……そっか」

まだどこことなく印象が無い。冷静に考えると好意を寄せられているわけで、自分から好きになったわけではないからだろうか？ そうなると少し失礼な気もするし、罪悪感も沸いてしまう。

「ん……」

先ほどまで好きだの愛してるだの思いながら身体を重ねていたのに、いざ風呂を上がって恥ずかしいと思ったりするのは、覚悟の無さなのか？

「わり、先に行くわ……」

「照れてる」

「うっせ」

「そうであれば良いのだけれど……」。

徹はぼんやりしながら食堂に向かう。まずは空いたお腹をいっぱいにしてから考えよう。それでいい。そう思っ……。

「……！」

足早にやってくる真奈が見えた。徹は慌てて顔を隠すが、どうして隠そうとしたのかわからない。

「や、やあ……今から風呂か？　はは……良い湯だったよ」

隠れられる場所も無く、顔を隠したところで背格好ですぐばれる。無駄な努力は切り上げ、普通を装って話しかける。

「そう……」

真奈は言葉少なく、足早に脱衣場に入る。

「あ、おい、まだ……」

睦美が居る。そう言いかけて余計なひと言だと思った。脱衣場で一緒になっていることをわざわざ言う必要などなく、変な勘繰りをされかねない。

「うん、わかった」

振り返る彼女の声。微かな違和感。どこから感じたのか？　それは鼻。臭いと言ったら失礼だけれど、その臭いは栗の花の……。